

論文の内容の要旨

戦術、「翻訳」、出会い

—戦術的ピリオダイゼーション、あるいは社会的組織化の過程としてのトレーニングと試合をめぐるマイクロ人類学

相原 健志

本論は、サッカーチームを一つの〈小さな社会〉として捉え、そのトレーニングを動的な社会的組織化の過程と見なし、それらを表現する諸概念を創出しつつ、〈小さな社会〉とその構成過程を描くことを試みる。具体的には、戦術的ピリオダイゼーション(以下、PT)と呼ばれるサッカーのトレーニング方法論の理論と応用実践を素材とし、それを組織化の過程をめぐる一つのマイクロ人類学として変容させようと試みた。

第 I 部第 1 章では、PT の理論的な概要を整理し、マイクロ人類学としてこれを構成するための方法論的視座として、人類学者ヴィヴェイロス・デ・カストロのいう「翻訳」という操作に着目した。そこから、PT の理論を他の人類学と出会わせることで人類学のものへと「翻訳」し、またそうして変容した PT を、その応用実践という事例と出会わせることで、別様に変容させるという道筋を提示した。

第 I 部第 2 と 3 章では「翻訳」の作業を、PT が文献的に示している諸概念について、PT と他の人類学を出会わせながら、実際的に展開した。

第 2 章では、戦術と複雑なシステムという概念を中心に、行為の集団性と、それが埋め込まれている環境という観点から、PT と人類学的実践理論を出会わせた。PT の戦術概念は、選手たちのプレーを包括的に捉えたときの様相を指示し、複雑なシステムとは、多種多様な因子が働きつつプレーが展開される環境を表現する概念である。PT は、常にプレーを戦術の様相において包括的に捉え、常に選手たちを複雑なシステム内に晒すことで、特定のプレースタイル

を実践的に学習させようとする。具体的に＜小さな社会＞の具体的な理念とであるプレースタイルは、自己差異化する状況たる複雑なシステムと同じく、自己差異化していく。実践理論と出会うとき、PT は、行為者が実践的に当該実践に参加して学習が進行する点で共通しているが、人の配置の構造と学習されている実践の変異可能性を積極的に肯定しており、行為と環境の変化可能性を最大限考慮しており、いわば自然化された実践理論であると言える。

第 3 章は、行為者たちの連結の様式および環境の経験の様式としての情動を「翻訳」した。まず、情動をめぐる PT の理路が必ずしも明確ではないため、PT が依拠する神経科学者ダマシオの議論と、ダマシオの依拠する哲学者スピノザへと辿って解きほぐし、PT を、PT に内在するダマシオとスピノザに出会わせた。さらにそれを情動の人類学の実存的な次元と出会わせ、PT における情動の社会的性格を析出した。PT は選手たちの行為を、情動(行動)、表象(行動のイメージ)の両面を包括的に捉え、そして戦術概念の包括性は、スピノザ哲学の心身並行性に相当することが明らかになった。PT における社会的組織化とは、複雑なシステムのただ中で、選手たちがスピノザ哲学の概念でいうコナトゥスを作用させながら、悲しみを与える出会いを避け、喜びを与える出会いを希求すること、情動・表象の水準において他者と結びつくこと—哲学者ジル・ドゥルーズの語を借りてこれを出会いの組織化と呼んだ—と「翻訳」された。また、ダマシオによれば情動・表象は常に変化する可能性に開かれており、PT の「複雑な進歩の原理」概念もトレーニングが常に直線的に進むとは限らない—実践の学習の進路は、ときに過去に取り組んでいたものに再度取り組むなど複雑なかたちを描く—と述べる。

このように PT の描くトレーニングと試合の過程とは、複雑なシステムに晒されつつ刻々と変化していく行為者たちの情動と表象を、具体的なプレースタイルを基準として、連結させるプロセスであると「翻訳」できる。トレーニングは、環境、行為、プレースタイル、情動と感情、能力といった点について、変化の可能性を全面的に肯定した上で展開される出会いの組織化の過程だと概念化される。

第 II 部(第 4-8 章)は、第 I 部での他の人類学との出会いにより変容した PT を、ポルトガルのサッカークラブ FC フォシュ U-17A チームの 2013-2014 シーズンのトレーニングと試合の過程での応用実践を事例とし、再「翻訳」を試みた。

第 4 章は、FC フォシュに入った経緯を整理し、当クラブのポルトガルサッカーにおける位置、調査方法、調査者の位置、第 5 章以降に言及するコーチングスタッフや選手たちの基礎情報を整理した。

第 5 章は、当チームの 1 週間の具体的なトレーニングの構成を例示し、疲労とそれに関わる概念の「翻訳」を行った。PT において環境つまりメニューは不測の事態が起きるよう設計され(「複雑なシステム」、環境に強度上の差異(戦術的強度)が設けられ、1 週間の中でその強度が調整されている(「水平的変移の原理」)。その環境の強度と相関するのが、選手たちの経験

する心身の疲労である。また疲労は、第3章で言及したスピノザ哲学から、行為者の能力の通減、あるいは戦術的強度の許容量の通減—スピノザ哲学でいうアフェクトゥス概念に相当する—であると「翻訳」される。そこから、PT が潜在的に有する、トレーニングを根幹から律する条件—選手たちの能力の有限性と、トレーニング上の時間の有限性—が明らかになった。

第6章は、2013年9月から11月にトレーニングにて集中的に取り組まれた「恐怖」という課題について考察した。「恐怖」は、選手が他者とパスを繋げられないことを指示しており、他方でそれは他者との協働的なありかたの実現可能性が低いままに抑制されているというかたちで戦術的組織化上の問題とされていた。いかなる方策によってその解決が図られたかを、当該時期のトレーニングと試合内容から検討した。その結果、出会いの組織化という「翻訳」された概念は、選手たちの配置におけるセクションの連結、PT が分類する4つの時間(攻撃、守備、攻撃から守備への切り替え、守備から攻撃への切り替え)に関わる連結、また選手たちの有限な能力(「なしうるかぎりのこと」)の連結、そして相互に異なる諸個体が一つの高次の個体へと合成していくこと—これが構成された<小さな社会>である—として再「翻訳」された。

第7章は、とりわけ2013年12月と3月の出来事を中心的な対象とし、選手たちの情動と表象、またそれに連関した出会いの組織化の不安定性—先述の「複雑な進歩の原理」に含意されていたような、以前に解決したはずの課題が再び現れ、それに取り組まざるを得ない事態—を論じた。この時期、出会いの組織化の営みは、前章で見たような諸連結をほどかれ、脱組織化する危険に晒された。各メニューは、第5章で論じたように、一定の戦術的強度を選手に要求する。しかし、メニューによって設計された環境内で、選手たちが期待されている戦術的強度よりも低いプレーを低い集中力によって展開した。この集中力の低下、戦術的強度の低下に相関して現れる背景として、FC フォッシュの選手たちの事情—プレーすること、特にプロになろうとするモチベーションが欠如している場合が多く、私生活での自律性が欠如している可能性があった。この考察によって、PT が潜在的に備えていた次元、トレーニングでのプレースタイルの習得、過去、現在、未来という時間的次元が垣間見えた。

第8章は、この時間的次元について検討し、PT を一つの時間論として「翻訳」した。トレーニングは、「階層化」「傾向性の原理」「矮小化せず分割する」といった「操作化」によって、直後の試合で期待され要求されると予想されるプレースタイルを選手たちが学習することを可能にする営みである。この点で、トレーニングの現在は、直近の試合という未来を予告する。しかし、身体技法の学習をめぐる議論と対比すると、「複雑な進歩の原理」概念が含意するように、トレーニングの現在は、他者とさまざまな観点から連結する未来(第6章)も、連結がなされない脱組織化する過去(第7章)も、同時に潜在的に含み込まれている。喜びある小さな社会を実現するか(第6章)、脱組織化されたままの過去を再来させてしまうか(第7章)は、トレーニングの現在にて要求される戦術的強度を最大限生き抜き、「なしうるかぎりのこと」をなしきることに存

する。

以上、「翻訳」により析出された、PT の描く〈小さな社会〉の組織化の過程としてのサッカーと試合とトレーニングをめぐるマイクロ人類学は、以下のようにまとめられる。

〈小さな社会〉の構成過程において、選手たちは常に能力が有限な状態にあり(「疲労＝アフektゥス」)、実践と学習のための時間も限られている。それは、この能力の範囲内で、各メニュー、各曜日、各週、複雑な程度を調整し(「複雑なシステム」、「水平的変移の原理」、実践的参与の強度＝「戦術的強度」、テーマを絞り込み(「階層化」、プレースタイルが変異する可能性に開かれた動的な過程である(「戦術」「複雑なシステム」)。そのなかで特定のテーマに実践的に取り組み、当該プレーを実践的に経験できるように努力される(「コナトゥス」、「傾向性の原理」)。そうしてプレースタイルが試合において実現されること(「心身並行」の「情動・表象」の両面における「出会いの組織化」「空間・時間・能力上の連結」)、すなわち〈小さな社会〉の達成が目指される。しかし、トレーニングの現在は、試合という未来において要求され期待されているプレーを含み込む一方、組織化できていない過去も同時に潜在的に含み込んでいる(「複雑な進歩の原理」)。そうしたなか、プレースタイルという他者と時間・空間・能力面で連結する〈小さな社会〉を実現するための条件は、その現在の強度の上限を生き抜き、現在時に最大限の集中力を傾けること(「なしうるかぎりのこと」「全てはピッチにある」)にある。